

第一次世界大戦以前のヴィリー・ミュンツェンベルク

大森 北文

はじめに

ドイツの社会主義者ヴィリー・ミュンツェンベルク (Willi Münzenberg) の死体は、1940年10月にフランスのモンターニュ村で発見された。自殺なのか他殺なのか、他殺ならばそれはナチスによるものかスターリンの指示によるものか、謎につつまれた最期であった。

生前のミュンツェンベルクは様々な顔を持っていた。国際労働者救援会の指導者として、世界各国の労働者を窮乏から救済し、また労働者に対する人権侵害を厳しく告発した。それらの活動に必要な資金を得るために「ミュンツェンベルク・コンツェルン」を経営し、「赤い富豪」とも称された。「コンツェルン」からの収益は、反ファシズム世界委員会の運営にも使われた。ヴァイマル時代のミュンツェンベルクは、コミンテルン執行委員であると同時に、ドイツ共産党の国会議員でもあった。国会放火事件の直後にドイツを離れてからは、フランスを舞台に様々な反ファシズム運動を組織した。その過程で非共産主義者との共同を積極的に進めた結果、スターリンによる粛正の対象となり、ドイツ共産党とコミンテルンを除名されることになる。すでにナチスによって死刑宣告を受けていたミュンツェンベルクにとって、それは生命の危険の増大を意味した。ミュンツェンベルクの死の原因について様々な推測が成り立つ所以である。

ところでミュンツェンベルクは、社会運動家としての第一歩を、第一次世界大戦以前の時期に青年運動の分野で歩み始めた。その運動の中で彼は、社会運動の有能な組織者として頭角を現していく。後年、コミンテルンやドイツ共産党の教条主義に拘束されることなく、非共産主義者との共同、統一戦線戦術を柔軟に追求したミュンツェンベルクの原点がどのように形成されたのか。彼の青少年時代に焦点を当てて、この点を多少とも明らかにすることが本稿の課題である。

1. エアフルト時代のミュンツェンベルク

(1) 徒弟として

ミュンツェンベルクは、1889年8月14日にドイツのエアフルトで生まれた。旅館を営む両親は生粋のプロイセン的心情の持ち主であったという。在郷軍人会（Kriegerverein）に所属する父親は徹底した軍国主義者であった。母親は彼が6歳の時に亡くなったが、死の床にあってもなお、息子が兵士になることを望んだ。母を亡くした後のヴィリーは、粗暴な父親に育てられることになり、旅館の仕事に毎日駆り出されるだけでなく、しばしば激しく虐待された。その父親もヴィリーが13歳のときに亡くなる。孤児となったヴィリーは、国民学校を卒業すると同時に、理髪店に徒弟奉公に入ったが、その店主もまた暴力的で冷酷であったという。兄弟子との関係がうまくいかなかったこともあり、ミュンツェンベルクは早々にこの徒弟関係を解消した。その後1904年の秋に、彼はエアフルトの靴工場で靴型整備見習工として働き始め、そこで初めて労働運動と政治運動に組織された労働者たちと出会うことになる⁽¹⁾。

当時のエアフルトには「プロパガンダ (Propaganda)」という青年教育団体が存在したが、ミュンツェンベルクは、その団体についてほとんど知らなかった。そのメンバーたちが社会主義者であるということを知り聞いていただけである。そもそも当時の彼は、「プロパガンダ」という言葉自体を理解することができなかった。その原因のひとつは彼が受けた初等教育にある。ミュンツェンベルクが通ったゴータ近郊の国民学校の教育環境は劣悪で、8学年がひとつの教室で1人の教師によって教えらるというものであった。そこでの授業は、聖書に基づいた歴史、歌唱、算数は1から20までの掛け算、地理はゴータ公領の範囲内、歴史は大公家の歴史に限られていた。当時、近郊の村々からエアフルトの靴工場、ランプ工場、金属工場などに通う他の少年たちもまた、ミュンツェンベルクと変わらない教育を受けていた⁽²⁾。したがって、彼らには「プロパガンダ」という言葉だけでなく、労働者の運動で用いられる様々な言葉を理解する前提が不足していたのである。

このような環境に育った当時の青少年を労働者の運動に引き寄せたのは、現実の劣悪な生活状況であった。当時のミュンツェンベルクの週給は4マ

ルク 20ペニヒしかなく、その中から家賃として週に2マルクが消えたため、結局、食事や衣服、娯楽のためには2マルク 20ペニヒしか残らなかった。飢えてこそいなかったが、決して満腹になることはなかったという。社会的に恵まれた同年代の青少年たちが歌や詩を口ずさむ一方で、ミュンツェンベルクたちは自然や風景の美しさを楽しむこともなかった。彼らが常に考えていたのは食べることであったという⁽³⁾。

(2) 青年運動への参加

こうした劣悪な生活を送る中でミュンツェンベルクは、年長の同僚たちから、社会主義や労働組合について教えられ、次第に政治的自覚を高めていく。そして1906年、ミュンツェンベルクは「プロパガンダ」の最年少の会員となる。当時の「プロパガンダ」は、19～28歳の労働者15～20名で構成されていた。そして、ドイツ社会民主党の公式の政策に満足できず、より急進的な活動を望む活発な社会主義者グループでもあった。いわばエアフルトの社会民主党組織における最初の反対派であったこの組織には、ヴィルヘルム・シュルツ (Wilhelm Schulz) やカール・クライン (Karl Klein), ゲオルク・シューマン (Georg Schumann), パウル・ゼーラント (Paul Seeland) など、後にドイツ共産党の著名な活動家となっていく青年たちが加入していた⁽⁴⁾。

「プロパガンダ」に加入したミュンツェンベルクは、そこで初めてカウツキーの著作を読み、社会主義的労働運動の基本的な学習を始めた。それまでもっぱら小説しか借りなかった市の図書館からは、ラサールやエンゲルスの著書も借りるようになった。この時期のミュンツェンベルクは読書と議論に没頭した。時には仮病を使って仕事を休み、何週間も自宅で読書が続けたという。さらに彼は、自分が学んだことを同僚にも話して聞かせ、同年代の青少年たちを12名以上も一度に「プロパガンダ」に加入させた。

このように、ミュンツェンベルクの加入と、その後の彼の活動によって、「プロパガンダ」の会員数は急速に増加したが、そのことが組織の構成に変化をもたらすことになった。ミュンツェンベルクが加入した当時、20歳未満の会員はほぼ彼一人であったが、その半年後には彼と同年代の会員が多数を占めるようになったのである。もともと青年労働者に対する教育団体として設立された「プロパガンダ」は、若年層の徒弟や労働者が多数を占めるプロレタリア青少年団体に变化した。その結果、マンハイムに本部を

置く南ドイツの青年中央団体「ドイツ青年労働者婦人同盟 (Verband juger Arbeiter und Arbeiterinnen Deutschlands)」とも連絡をとるようになり、その機関紙『若き親衛隊 (Junge Garde)』をエアフルトで販売するようになったのである⁽⁵⁾。

一方、当時は北ドイツでも同様の青年中央団体「ドイツ自由青年組織連合 (Vereinigung der freien Jugendorganisationen Deutschlands)」がベルリンに本部を置き、機関紙『働く青年 (Arbeitende Jugend)』を発行していた。「プロパガンダ」が正式に加盟したのは、この北ドイツの中央団体であった。1906～07年の冬、エアフルトの組織は正式にベルリンの中央団体の加盟組織となり、それと同時に団体名も「プロパガンダ」から「自由青年エアフルト (Freie Jugend Erfurt)」に変わった。

ミュンツェンベルクがエアフルトの青年組織の責任者になったのはその時期であった。彼が「プロパガンダ」に加入してから、わずか一年たらず後のことである。若年層の会員が短期間の内に増加する一方で、年長の会員たちが兵役にとられたため、ミュンツェンベルクの年齢層に組織内の責任ある立場がめぐってきたのである。しかし当時はまだ、社会民主党や労働組合が「自由青年」を援助することは期待できず、組織の運営と活動はほとんど自分たちで行わなければならなかった⁽⁶⁾。まだ年若い会員が毎月、自分たちで講義を行った。それらは、理論的明瞭さという点で決して高いレベルではなかったが、それでも、会員たちが注意深く書物を読み準備して行われたものであった。そして、会員同士の自由な議論が活発に行われた。後年、ミュンツェンベルクは「自律的プロレタリア青年組織における自治は、計り知れないほどの教育的価値を持っていた。私はそれを、『自由青年』の活動を通して経験した。それゆえ、後にドイツでもスイスでも、青年組織の自律性を断固として擁護した」と回想している⁽⁷⁾。

(3) ドイツにおける労働青年運動の再編

こうしてミュンツェンベルクは、1907年にはエアフルトを代表する若き社会主義者となっていた。しかし同時に、その時期のドイツ労働青年運動は大きな転換点を迎えていた。ミュンツェンベルクが「計り知れないほどの教育的価値」を認めていた青年組織の自律性が危機に瀕したのである⁽⁸⁾。

その契機となったのは、1907年からドイツ帝国議会で議論が始まり、1908年5月15日に発効した帝国結社法であった。それは、プロイセン結

社法をより厳格に改変し、それを帝国全域に適用するものであった。18歳未満の青少年が政治活動・政治組織に参加することを禁じる同法によって、公然たる社会主義組織であった南ドイツの「ドイツ青年労働者婦人同盟」は存続し得なくなり、1908年5月に、自ら解散を決定したのである⁽⁹⁾。

一方、もともとプロイセン結社法の下で活動してきた北ドイツの「ドイツ自由青年組織連合」は、「我々の組織は帝国結社法によって何ら拘束されるものではない」という立場を表明していた。機関誌『働く青年』の1908年5月号は、「帝国結社法の下では、我々の組織形態のみが唯一、法的に許容されるプロレタリア青年の組織形態である。我々はこの組織形態を——労働青年の利益と保護のために——すみやかに全ドイツに拡張しなければならない」⁽¹⁰⁾と述べている。そして北ドイツの組織は、「自由青年組織の将来にとって重要な諸決定を行うため」⁽¹¹⁾の第2回大会を、1908年9月6日にベルリンで開催することになる。「全ドイツのプロレタリア青年が青年組織の自律性という問題で意見を一致させる」⁽¹²⁾ために開かれたこの全国大会に、「自由青年エアフルト」を代表して参加したのは、当時まだ19歳のミュンツェンベルクであった。

大会での発言の多くは、青年組織の自律性を擁護するものであった。大会が決定した組織規約は、帝国結社法に違反しないように、その第2条で、組織の目的を「会員の経済的・精神的利益を実現し、またそれを促進すること」とし、第3条で、「この組織は政治的性格も宗教的性格も持たない」と明記した。しかし、より重要なことは、規約第1条で、組織名を「ドイツ労働青年連盟 (Verband der arbeitenden Jugend Deutschlands)」とし、活動範囲を「ドイツ帝国全域」と規定したことである。これは、「労働青年の経済的利益を真に代表する、ドイツで唯一の青年組織」を規約として明確化したものであった。こうして、北ドイツの青年諸組織は、組織の解散ではなく、その存続と統一への道を選択し、青年独自の新しい全国組織を設立したのである⁽¹³⁾。

(4) ドイツからスイスへ

9月6日の全国大会の結果は、ミュンツェンベルクにとって「期待していた以上のものであった」⁽¹⁴⁾しかしそれは、一週間後にニュルンベルクで開かれたドイツ社会民主党大会によって裏切られることになる。

同党大会は、社会民主党の最終的な青少年対策を決定することが中心課

題の一つであった。党大会に提出された青年問題に関する決議案が25本にのぼったことは、この問題に対する党内の関心の大きさを示していた。大会代議員から出された決議案の多くは自律的な青年組織を支持するものであった⁽¹⁵⁾。こうした党内の状況を考慮して、大会は、非政治的青年組織の存続についてはそれを保証した⁽¹⁶⁾。しかし同時に、「青年の経済的政治的利益を代表するのは労働組合と党のみ」であるという観点から、青年教育のための特別の機関を党内に設置することを決定した⁽¹⁷⁾。そして実際に、同年12月には、社会主義青年運動に関わる一切の決定権を持つ唯一の中央組織として、「ドイツ労働青年中央本部 (Zentralstelle für die arbeitende Jugend Deutschlands)」が社会民主党内に設置された。この「中央本部」は、社会民主党・自由労働組合・青年組織からそれぞれ4名の計12名で構成され⁽¹⁸⁾、機関紙として『労働青年 (Arbeiter-Jugend)』を発刊した。一方、ニュルンベルク党大会の直前に発足したばかりの「ドイツ労働青年連盟」は、「中央本部」が設置される以前に自ら解散した。それは、全国大会を開くことなしに、地区指導者会議 (1908年10月11日) のみによって決定された⁽¹⁹⁾。その機関紙『働く青年』も、「我々の任務は終了した」⁽²⁰⁾と述べ、1909年1月号で廃刊された。こうして、ドイツの労働青年運動は、社会民主党と労働組合の統制下に置かれたのである。

「ドイツ労働青年連盟」の解散は、ミュンツェンベルクにとって明らかに「屈服」⁽²¹⁾であった。だが彼は「自由青年エアフルト」の活動を続け、その組織的な独立性を守ろうとした。一方、ニュルンベルク党大会以降、地方党組織による青年組織への関与の度合いは強められ、エアフルトもその例外ではなかった。それまで居酒屋を使っていた青年集会在党の事務所で開かれるようになり、学習に際しても党から講師が派遣されるようになった。その後、社会民主党指導部の指示にもとづいて、エアフルトの党組織内にも「教育委員会」が設置され、そこが青少年に対する教育活動を直接組織するようになる。それには、講演会だけでなく、音楽家を招いた祭典など文化的な催しも含まれていた。青少年自身が自主的に行うことは残っていなかった。彼らはただ催しに参加すればよくなったのである。後にミュンツェンベルクはエアフルトを去ることになるが、その背景のひとつには、こうした状況の変化——エアフルトの青年運動で次第に居場所がなくなった——があった。

ところで1909～10年にはプロイセンで、不平等な「三級選挙権」の撤

廃を求める運動が高揚する。その運動には、社会民主党のみならず自由主義左派の諸党も参加した。ミュンツェンベルクが初めて公開の政治集会で発言したのも、この運動の渦中であった。当時のミュンツェンベルクは20歳以上の普通選挙権を主張していた。ある集会で彼は、「18歳で統治する資格を得る皇太子と、20歳になっても選挙権の行使に不十分とされる」自分たちを比較し、そうした状態を批判した⁽²²⁾。しかし公開集会でこの発言がもとで彼は職場を解雇されることになる。彼は他の働き口を探したが、当時のエアフルトでミュンツェンベルクを雇う工場はなかった。ミュンツェンベルクに残された道は、当時、ドイツの若い職人の間で一般的に行われていた遍歴の旅 (Walze) に出ることであった。そして1909年の夏の終わり、ミュンツェンベルクはわずかな荷物をもってエアフルトを去る。所持金は3マルク足らずであった。

2. チューリヒ時代のミュンツェンベルク

(1) スイスの労働青年運動

上述のように、ミュンツェンベルクはすでにエアフルト時代に青年運動を経験していたが、そもそも徒弟や青少年労働者による運動がヨーロッパ各国に登場したのは、19世紀から20世紀への転換期であった。例えばそれは、デンマークで1899年、フランスとノルウェーでは1900年、イタリアが1901年、スウェーデンとドイツで1903～1904年、フィンランドとスペインでは1906年のことであった。一方スイスでは、すでに1894～1896年に労働青年の組織が誕生した。これは、オーストリアおよびハンガリー(1894年)、ブルガリア(1898年)などと同時期のことである。それ以前に労働青年組織が存在したのは、オランダ(1885年)とベルギー(1886年)だけであった⁽²³⁾。

19世紀末に登場したスイスの青年組織は、「若きバーゼル (Jung-Basel)」や「若きベルン (Jung-Bern)」といった名称を持ち、主に講演会や語らいの夕べ、徒歩旅行などに取り組んだ。しかし、それらは労働組合活動家によって指導されていたので、彼らの活動の比重が組合に移ると、青年組織は次第に活動を停止していくことになった。

厳密な意味で、後の社会主義青年組織の起源と言えるのは、1900年春にチューリヒで結成された「アウサーズィール青少年同盟 (Jungburschen-

verein Außersihl)」である。それはもともと、牧師プフリューガー (P. Pflüger) の指導の下で、彼の受堅者を中心に結成され、主に青少年の技術的・学問的教育を促進するための組織であった。同盟は自前の事務所を持ち、会員はそこで新聞や書物を読むことができた。後の青年ハイムの原型である。その事務所では様々な催しが開かれたが、青少年の戸外への欲求を満たすために徒歩旅行などもたびたび行われた。毎週定期的に行われた会合では、政治問題はほとんど議論されず、たいていは技術や科学に関する講演が行われた。政治的には中立の立場をとっていたが、1903年に同盟が開いたある祝祭では、祖国を称える歌が合唱されたという。また、1904年4月の会合では、メーデー行進に参加すべきかという問題に関して「否」という結論を出している。ただし「この問題は会員一人一人の自由意思で決定すべきである。行進に参加したいと考える者は参加すべきである」ということであった。プフリューガーの同盟は、決して社会主義的ではなかったが、同時に、反社会主義的な性格のものでもなかったと言えよう⁽²⁴⁾。

同盟の性格が変化し始めたのは1904年の秋頃からであった。同年10月に同盟は、激しい議論の末にチューリヒ労働組合に加盟し、同時に、オーストリアの社会主義青年同盟の機関紙『青年労働者 (Jugendliche Arbeiter)』の団体購読も決定している。1905年からは同紙の講読会が行われるようになり、政治問題も議論されるようになった。それに応じて会員からは、社会民主主義に関する講演を要望する声上がるようになった。オーストリアなど他国の社会主義青年組織と接触する中で、チューリヒの青少年同盟の中にも政治的自覚が芽生え始めたのである。と同時に、当時の労働運動を取り巻く状況もまた、青少年同盟に影響を及ぼしていた。1905年前後、チューリヒでは軍国主義に反対する運動が高揚した。それを主導したのは「反軍国主義連盟 (Antimilitaristische Liga)」であった。そしてこの連盟のメンバーたちは、しばしば青少年同盟の学習会で講師として活動したのである⁽²⁵⁾。さらにチューリヒでは1905～06年に、自動車工場の労働者を中心に大規模なストライキが勃発していた。警官隊と軍隊が鎮圧に動員されるほど紛糾したこの争議もまた、青少年同盟に影響を及ぼさずにはいなかった。というのも、この頃になると同盟のメンバーは、かつてのようにプフリューガーの受堅者だけでなく、徒弟や若年労働者層が多数を占めるようになっていたからである。親方による日常的な虐待や劣悪な労働環境を甘受していた彼らは、自らの経済状態を改善するために、青少年同盟がより

積極的な役割を果たすことを期待したのである⁽²⁶⁾。

こうして青少年同盟が次第に労働運動に接近していく中で、1906年のクリスマスには三つの青少年同盟 (Ausersihl: Altstetten; Wipkingen) がひとつに統合され、「スイス青少年同盟連合 (Verband der schweizerischen Jungburschenvereine)」が結成される。この連合は中央指導部を確立し、機関紙『スコープオン (Skorpion)』を発行することになる。1907年2月の同紙創刊号によれば、「この『スコープオン』はスイス青少年同盟の中央機関紙であり、暗黒の深淵から光明を追い求める若き世代の闘争紙」⁽²⁷⁾であった。

1900年に1人の牧師の指導の下で結成された青少年同盟は、それから6年の後に、全く規模と性質が異なる組織へと変貌をとげていた。チューリヒの青少年同盟が開催する講演会や講習会には、1903～06年の4年間で約15,400名の青少年が参加した。同盟の図書室からは1906年だけで2,000冊が借り出された。50名の会員から始まった同盟は、1906年に200名を擁した。政治的にも著しく急進化した。『スコープオン』創刊号は述べている。「あらゆる抑圧、不正義、偽善は、我々若者にとって憎むべきことである。人間であることは、すなわち闘士であることだ。われわれ青少年同盟は闘士の資質を育み、いたるところで正義のために活動できる良質のアジテーターを生み出すであろう」⁽²⁸⁾と。

(2) ミュンツェンベルクとスイスの青年組織

ミュンツェンベルクが、長い放浪の末、チューリヒに住むようになったのは、1910年の8月のことであった。当時、スイスの労働青少年組織はすでに400名を超える会員を擁し、その機関紙『自由青年 (Freie Jugend)』(『スコープオン』の後継紙)の年間発行部数も30,000部を超えていた。そしてミュンツェンベルクは、チューリヒに居を定めるや否や、この青少年同盟に加入したのである。

しかし1910年当時の青少年同盟の内部は、アナーキズム的な傾向が支配的であった。ミュンツェンベルクもまたその影響を受け、しばらくは「手に入る限りのアナーキズム的文献を、文字通り読みあさるようになった。クロボトキンの『万人の幸福』、『ある革命家の思い出』、『フランス革命』、『ロシア文学史』などや、さらにバクーニンやモストの著作やパンフレット、その他アナキスト系の新聞や雑誌を読んだ。」⁽²⁹⁾ ミュンツェンベルクが

アーキズムに心を奪われたのは、何よりもそれが彼にとって未知のもので新鮮に映ったからである。だが同時に、エアフルト時代に経験した「社会民主党の官僚的体質」に対する反発が、アナーキズムの反権威主義的心情に共鳴したからでもあった⁽³⁰⁾。

このようにスイスの青少年同盟をアナーキズムが支配する中で、ついには組織の責任者や幹部といった役割は否定されるようになる。また、理論を軽視するようにもなり、党や労働組合から講師を招いて講演会をする場合でも、それは講師をやり込めるために行われたという。その結果、党や組合から青少年同盟の解散とドイツ流の青年委員会⁽³¹⁾の設置が議論されるほどであった。さらに、会員の会費支払義務についても「小市民的・社会民主党的な悪弊」として廃止され、会員がその収入と能力に応じて自由意思で支払うことにされた。しかしその結果は、誰も会費を支払わないということになり、かえって組織内に混乱をまねくことになった。そして、この失敗を契機に、ミュンツェンベルクは次第にアナーキズムから決別していったのである。

ミュンツェンベルクの回想によれば、1910年の秋から冬にかけて、彼を中心とする少人数グループがアナーキズムから距離を置き始め、次第に組織全体からアナーキズムの影響を払拭していったという。その過程で組織内部では激しい路線対立が生じたが、最終的にアナーキストが脱退することによって、青少年同盟は再び大人の労働運動と密接な——ただし運動内部の反対派として——関係を回復したのである⁽³²⁾。

こうしてアナーキズムを克服しつつあったミュンツェンベルクがイタリアへ旅だったのは1911年の春であった。ミラノやジェノヴァ、ローマ、フィレンツェなど各地の青年運動の指導者たちと会い、またそこでの集会やデモに参加した⁽³³⁾。イタリアの青年組織は、社会主義的・反軍国主義的な宣伝活動を主要な課題としており、集会やデモ行進、パンフレットやチラシの配布などに取り組んでいた。スイスの青年組織と同様に、やはりアナーキズムやサンジカリズムの影響が広がった時期があり、1907年にはサンジカリストと社会主義者との間で分裂を経験した。ミュンツェンベルクを各地で歓迎したのは、機関紙『前衛 (Avanguardia)』を発行する社会主義者たちの青年組織であった。サンジカリストの青年組織はイタリア社会党と全く関係を持たなかったが、社会主義者の青年組織は、組織的・政治的な独立性を損なうことなく党と密接な関係を築いていた⁽³⁴⁾。こうしたイタ

リアの青年組織との接触は、スイスでも確固としたプロレタリア的・社会主義的な青年組織を建設する必要性をミュンツェンベルクに自覚させることになる。

スイスへの帰国早々、ミュンツェンベルクは青少年同盟の課題を3つに整理した。それは青少年に対する教育活動と経済闘争の組織、反軍国主義宣伝であった。講演会と会合が毎週行われるようになった。ミュンツェンベルクが初めて編集した青少年同盟の年次活動報告書『フリューロート (Frührot)』(1912年5月)には、1911年3月から1912年5月までに行われた講演会のテーマが記録されているが、それによれば、その内容は、「アルコール問題」や「パリ・コミューン」、「労働組合と青年同盟」、「徒弟の経済状態」、「軍国主義とプロレタリアート」、「社会主義の基本」など多岐にわたった⁽³⁵⁾。こうした教育活動だけでなく、党が行う反軍国主義の催しには組織として参加し、またドイツの社会主義者K・リープクネヒトによる『軍国主義と反軍国主義』を宣伝・販売するなどの活動を行った。1911年7月17日にはチューリヒで大衆的な反戦集会を行い、そこにK・リープクネヒトを講演者として招いている。そして同じく1911年の夏には、新たに女子会員の加入を認めるようになり、組織名称を「青少年同盟」から「チューリヒ社会主義青年同盟 (Sozialistische Jugendorganisation Zürich)」に改めたのである⁽³⁶⁾。

(3) スイス青年運動の指導者としてのミュンツェンベルク

すでにこの頃までに、ミュンツェンベルクは同盟内で指導的な役割を果たしていたが、名実ともに最高指導者となるのは1912年のことであった。その契機となったのは同年夏にチューリヒで起きた大規模なストライキであった。塗装工と金属労働者によって始められたストライキに対して、企業家側がドイツから大量のストライキ破りを雇ったことから、ピケ隊とストライキ破りとの間で衝突が起き、塗装工の中から死傷者が出たのである。市当局はそれに対してピケ禁止令を發布したが、それに対してチューリヒの労働組合連合が24時間の抗議ストライキを呼びかける。こうして始まったゼネラル・ストライキに対抗して、市当局は多数の組合指導者を逮捕したが、その中には労働組合連合の書記マックス・ボック (Max Bock) も含まれていた。そして彼は逮捕の数日後にカントン当局によってチューリヒから追放されることになる。だが、当時のボックは社会主義青年同盟

の責任者も務めていたため、彼の追放は青年同盟にも新しい指導者の選出を余儀なくさせた。その結果、ポックの後継者となったのがミュンツェンベルクである⁽³⁷⁾。さらにポックは、機関紙『自由青年』の編集長でもあったため、彼はそれをも引き継ぐことになる。こうしてミュンツェンベルクは、チューリヒに住み始めてわずか2年後に、スイスの社会主義青年運動の最高責任者となったのである⁽³⁸⁾。

ミュンツェンベルクは、その後、1917年11月に逮捕、翌年11月にドイツに強制送還されるまで、スイスの社会主義青年組織で指導的な地位にあった。1914年からは、それまで勤務した薬局を辞め、青年同盟でただ1人の有給書記となった。ミュンツェンベルクの指導によって、スイスの労働青年組織は、その後、国際的にも有力な組織へと発展していく。1906年に200名だった会員数は1907年に250名、1908年に300名、1909年には380名、1910年には470名、そして1911年には540名に増加する。1912年には上述の騒擾の影響で493名に後退したが、ミュンツェンベルクによって立て直された組織は、1913年に再び763名に増加する。そして1914年1月には、944名の正会員(Aktivmitglieder)とおよそ1,300名の準会員(Passivmitglieder)を擁した。1915年1月には、1,680名の男子正会員と394名の女子正会員、1,700名の準会員となった。1917年12月には、6,000名を超える正会員と3,000名の準会員が150の支部に所属した。ミュンツェンベルクが編集する機関紙『自由青年』の年間発行部数もまた同様のテンポで増加した。1908年：2,400部、1909年：6,700部、1910年：30,600部、1911年：35,500部、1912年：39,300部、1913年：44,000部、1914年：60,000部。そして、それ以降の3年間で、その数は80,000部に増加したのである⁽³⁹⁾。

3. ミュンツェンベルクの青年運動論

ミュンツェンベルクは10年間にわたってスイスの労働青年運動に身を置いたが、その間最も重視したのは、党と青年組織の関係であった。彼は、エアフルトにおける経験から、青年運動が政党に従属することを拒否した。『自由青年』紙によれば、「青年組織の自律性はミュンツェンベルクにとって最も大切な理想であった。その自律性を傷つけようとする者は、ミュンツェンベルクから激しく徹底的に批判され、ついには二度とそういう企て

をしないと考えるようになった。ミュンツェンベルクは、なぜ青年が言論を抑圧されてはならないか知っていた。党内で沈黙を強いられているドイツ青年運動は、彼にとって最悪の例であった。周知のように、ドイツの青年運動は、ドイツ社会民主党とともに崩壊しただけでなく、ショービニストとナショナリストの陣営に加わるようになった。ミュンツェンベルクはこうした危険からスイスの青年運動を守ってきた。」⁽⁴⁰⁾

実際にスイス社会主義青年同盟は、ミュンツェンベルクの指導下で1913年に、社会民主党および労働組合連合との間で以下のような協定を結んでいる。

- ①社会民主主義的青年組織は、スイス社会民主党の綱領の地平に立ち、スイス社会民主党とスイス労働組合連合による諸決定に拘束されることを承認する。こうした前提の下で、党と労働組合連合は、社会民主主義的青年組織の中央金庫に対して毎年補助金を支払う。その金額は、党と労働組合連盟の担当機関がその都度決定する。
- ②青年運動との恒常的な結びつきを維持するために、党と労働組合連盟は、それぞれ1名の代表を青年組織の中央指導部に派遣する。当該代表者は、審議権と議決権を有する。
- ③党と労働組合連盟は、それぞれの地域組織に対して、当該地域の青年運動に最大限の注意を払うことを義務づける。[青年運動を] 強力に支援するために、地域の党組織、組合組織および教育委員会からは、青年組織 [の問題] に習熟している人間を、それぞれ1名ずつ [地域の] 青年組織の指導部に派遣しなければならない。青年組織は党と労働組合連盟に対して年次活動報告書を提出し、機関紙を送付しなければならない。
- ④党大会あるいは労働組合大会、党指導部あるいは労働組合委員会の会議で青年組織の問題が議題に上る場合、青年組織の代表がその審議に招請される。⁽⁴¹⁾

この協定に、青年組織の自律性を何よりも重視したミュンツェンベルクの意向が反映されていることは明らかであろう。政党との関係を否定するのではなく、組織の独立性を維持しつつ、密接な共同関係を追求したのである。そして、1916年にチューリヒで開かれたスイス社会民主党大会は、ミュンツェンベルクを党指導部の一員に選出する。それによって両者の共同関係はいっそう強固なものとなったのである。

おわりに

ミュンツェンベルクの妻バベッテ・グロス (Babette Gross) も指摘しているように、青年運動家としてのミュンツェンベルクは、1911年のイタリア旅行でひとつの転機を迎えたと言えよう⁽⁴²⁾。当時のイタリア青年組織は、全国で82以上のグループ、6,000名の会員を擁する大規模な組織であった(スイスの組織は540名)。政治的にはイタリア社会主義運動の中で左派に位置し、1912年に社会党指導部が青年組織を統制下に置こうとした際には、党内左派グループ⁽⁴³⁾と協力して、党指導部の解任と左派系指導部の確立に一定の役割を果たすことになる。アナーキズムの影響下で規律の弛緩と組織解体の危機を経験したミュンツェンベルクにとって、厳格に組織されたイタリアの青年運動はひとつの理想像であった。そしてイタリアの組織が、党に対して自律性を維持するだけでなく、党指導部の交代にも影響を及ぼしたという事実は、ミュンツェンベルクが後に「本来的に革命的な青年」論⁽⁴⁴⁾を主張する際、有力な根拠を与えることにもなった。1917年に『自由青年』紙は、ミュンツェンベルクが「青年組織は党の前衛でなければならない」と考えていたと評している⁽⁴⁵⁾。こうした青年組織論もまた、イタリア社会党における1912年の指導部交代劇に、ひとつの契機を見出したと思われる。

いずれにせよミュンツェンベルクは、遅くとも1913年には「組織の自律性」原則を確立していた。そして彼は、その原則を社会民主党に対してのみならず、後には共産党・コミンテルンに対しても主張する。1920年にミュンツェンベルクが青年組織のコミンテルン加盟に反対したのも、やはり青年運動の自律性を維持するためであった⁽⁴⁶⁾。さらに後に、この「組織の自律性」原則は、反ファシズム運動という大衆的な運動においても追求されることになる。その結果、ミュンツェンベルクは、自らが所属する共産党・コミンテルンの枠組みを超えて、広範な反ファシズム運動を組織することができたのである。

注

- (1) *Freie Jugend. Organ der Sozialdemokratischen Jugendorganisation der Schweiz*, Jg. 12 (1917), Nr. 26 (17. Dezember), S. 1.
- (2) Willi Münzenberg, *Die Dritte Front. Aufzeichnungen aus 15 Jahren proletarischer Jugendbewegung*, Berlin 1930, S. 15-16.
- (3) Ebd., S. 17-18.
- (4) Ebd., S. 18.
- (5) Ebd., S. 21.
- (6) プロイセン結社法が青少年の政治活動を禁じていたため、社会民主党は青少年への接近に慎重であった。また当時の社会民主党には、確固とした青少年政策が確立していなかった。この点については例えば、Walter Sieger, *Das erste Jahrzehnt der deutschen Arbeiterjugendbewegung 1904-1914*, Berlin 1958, S. 31-68 を参照。
- (7) Willi Münzenberg, a.a.O., S. 23.
- (8) 帝国結社法がドイツ労働青年運動の再編を促した点については、拙稿「ドイツ社会主義青年運動と労働組合—青年組織の自律性をめぐる論争(1908年)」『早稲田大学大学院文学研究科紀要(哲学・史学編)』別冊第21集(1995年2月), 139-147頁。
- (9) *Arbeitende Jugend. Monatsschrift für die Interessen der jugendlichen Arbeiter und Arbeiterinnen*, Jg. 4 (1908), Nr. 6 (1. Juni), S. 6.
- (10) Ebd., Jg. 4 (1908), Nr. 5 (1. Mai), S.1-3.
- (11) Ebd., S. 3.
- (12) 大会には 27 地方組織から 38 名の代議員が参加した(1908年6月30日現在の実勢力は 36 地方組織で 5,431 名)。同大会の内容については、Ebd., Jg. 4(1908), Nr. 10 (1. Oktober), S. 2-6.
- (13) 規約は会員の年齢制限について特段の規定を設けなかった。しかし大会が、18歳未満の青少年の加盟に関する地方組織用「模範規約」の作成を執行部に委任したことから、18歳未満の青年を排除しないことは明らかであった。Ebd., S. 5.
- (14) Willi Münzenberg, a.a.O., S. 39.
- (15) 例えば、党内左派カール・リープクネヒト(Karl Liebknecht)の意を受けた決議案は、「北ドイツにおいては何ら法律状態に本質的変化が生じていない」以上、「北ドイツの青年組織を解散するとか、それに対する党の態度を改めるような理由は何もない」と論じ、北ドイツ青年組織が選択した「北ドイツの組織形態をドイツ全土に拡張する」道を支持していた。SPD-*Parteitag-Protokoll* (zu Nürnberg, 1908), S.172-173.

- (16) ニュルンベルク党大会による青年問題決議の付則宣言は「すでに大人と共同で運営されている非政治的的地方青年組織の活動については、それを妨害しない」と明記したが、青少年だけの自律的組織については言及しなかった。Ebd., S. 192.
- (17) Ebd., S. 191-192.
- (18) *Arbeitende Jugend*, Jg. 5 (1909), Nr. 1, S. 1.
- (19) 「連盟」の解散は、北ドイツ青年組織の指導者たちが、ニュルンベルク党大会決定の中に、労働青年運動が統一される可能性を見出したためであった。K・リープクネヒトは、たとえ青年組織の自律性を一時的に犠牲にしても、青年組織の統一を「組織戦略の原則」とするよう、M・ペーテルスに書き送っている（9月24日付書簡）。Karl Liebknecht, *Gesammelte Reden und Schriften*, Bd. 2, S. 243-244.
- (20) *Arbeitende Jugend*, Jg. 5 (1909), Nr. 1, S. 1.
- (21) Willi Münzenberg, a.a.O., S. 41.
- (22) Ebd., S. 48-49.
- (23) ヨーロッパ各国における青年運動の成立については、Willi Münzenberg, *Die sozialistischen Jugendorganisationen vor und während des Krieges*, Berlin 1919, S. 9-47.
- (24) Wilhelm Münzenberg, *Aus der Geschichte der sozialdem. Jugendorganisation der Schweiz*, Zürich 1916, S. 6-8.
- (25) Romina Gavio, *Radikalisierung und Antimilitarismus. Die Entwicklung der politischen Haltung der Sozialistischen Jugendorganisation in der Schweiz von 1900 - 1918*, Zürich 2000, S. 14.
- (26) Wilhelm Münzenberg, a.a.O., S. 8-9.
- (27) *Skorpion. Offizielles Zentralorgan der schweizerischen Jungburschen-Vereine*, Jg. 1 (1907), Nr. 1 (Februar), S. 1.
- (28) Ebd., S. 4.
- (29) Willi Münzenberg, *Die Dritte Front*, S. 71.
- (30) Ebd., S. 72.
- (31) ドイツの青年委員会については、拙稿「ドイツ社会民主党の青少年政策 1908～1914年（前）」埼玉工業大学教養紀要『contexture』No. 18（2001年3月），77-92頁。
- (32) Willi Münzenberg, a.a.O., S. 76-77.
- (33) Ebd., S. 77-81.
- (34) Willi Münzenberg, *Die sozialistischen Jugendorganisationen vor und während des Krieges*, S. 17-18.

- (35) Willi Münzenberg, *Frührot. Jahrbuch der soz. Jugendorganisation Zürich III*, [Zürich 1912], S. 48-60.
- (36) Willi Münzenberg, *Die Dritte Front*, S. 88-89.
- (37) ドイツ人でもあったポックは、ミュンツェンベルクが深く信頼する青年運動の指導者であった。1910年8月当時、渡米の資金を得るためにベルンのホテルで働いていたミュンツェンベルクに対して、チューリヒでの就職先として亡命ポーランド人が経営する薬局を斡旋する手紙を書き送ったのもポックであった。Babette Gross, *Willi Münzenberg. Eine politische Biographie*, Stuttgart 1967, S. 34-35.
- (38) Willi Münzenberg, a.a.O., S. 105-108.
- (39) *Freie Jugend*, Jg. 12 (1917), Nr. 26 (17. Dezember), S. 2.
- (40) Ebd., S. 3.
- (41) Ebd., Jg. 8 (1913), Nr. 10 (Oktober), S. 3.
- (42) Babette Gross, a.a.O., S. 41.
- (43) 当時、イタリア社会党内で左派グループの拠点だったのは、後のファシスト、ムッソリーニが率いるミラノの党組織であった。
- (44) 青年層を「本来的に革命的 (von Natur aus revolutionär)」な存在とみなしたミュンツェンベルクは、1920年に、「青年は党の革命性に対する最も確固とした尺度となる。党が革命的である限り、青年はよるこんで自発的に党の政治路線の下で隊列を組む。しかし……党が革命への道から逸脱するや否や、青年は党と闘争するであろう」と述べている。Exekutiv Komitee der Kommunistischen Jugendinternationale (Hg.), *Unter dem roten Banner. Bericht über den ersten Kongress der Kommunistischen Jugendinternationale*, Berlin [1920], S. 44.
- (45) *Freie Jugend*, Jg. 12 (1917), Nr. 26 (17. Dezember), S. 3.
- (46) この点については、拙稿「共産主義青年インターナショナルの設立 (1919年) とW・ミュンツェンベルク」早稲田大学史学会『史観』第137冊 (1997年9月), 66-80頁。